

第十六回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

塩川 徹也 著『パスカル考』（2003年2月25日 岩波書店 刊）

塩川 徹也 しおかわ てつや 昭和20年（1945）生まれ。福岡県出身。専攻はフランス文学、思想。東京大学教養学部教養学科卒業。パリ・ソルボンヌ大学博士課程修了。東京大学大学院人文社会系研究科教授（受賞時）。現在は元東京大学大学院教授。著書は、“Pascal et les miracles”、『パスカル 奇蹟と象徴』、『虹と秘蹟—パスカル〈見えないもの〉の認識』、『パスカル『パンセ』を読む』、共編著に『フランス文学史』、『パスカル考』（日本学士院賞）、共訳書に、ロベール・シャール『東インド航海日誌』、他がある。

受賞のこぼ

哲学にはらかな憧れを抱きながら、地を這うような文献学に執着し、研究者は決して教養人ではないと思い定めて仕事をしてきた私にとって、和辻哲郎は天空に仰ぎ見る存在でした。それだけに今回の受賞は、身に余る光栄で大きな喜びですが、同時に大きな課題もいただいたと感じています。私の研究対象であるパスカルは、一級の思想家・文学者でありながら、宗教的な禁欲主義に深く浸透され、文化に対して否定的な態度を取っていました。しかしながら独創的な作家の仕事は、従来の文化と教養に厳しく対決するように見えながら、やがては人類の知的遺産の中に組み込まれ、私たちの精神生活を豊かにしていきます。歴史的記憶に支えられた教養が、ややもすれば軽視される風潮にあって、和辻哲郎の仕事はその価値を一層増していると確信しています。厳格な学究生活が、「松風の音」の繊細な聴取にそのまま通ずる境地を理想として、精進したいと願っています。

《選考委員評》

湯浅 泰雄

「クレオパトラの鼻が低かったら世界の歴史は変わっていたらろう」というような言葉をどこかで聞かれた方もいるかと思う。これはパスカルの『パンセ』（随想録）に出てくる句である。この句の正確な内容と意味については塩川さんの今回の受賞作の初めにわかりやすくのべられているが、『パンセ』という本は実はキリスト教の信仰の意味について考えるためのノートだったという。

パスカルは十七世紀、日本史の時代区分でいうと江戸時代前期のフランスの哲学者である。彼は若いころ数学や科学の分野で有名になったが、二回の回心を経験して、ポール・ロワイヤルにあったジャンセニズムの修道院で信仰生活に入る。当時のヨーロッパでは新旧両派による宗教戦争の余波がつづいていた。フランスはブルボン王朝が支配するカトリックの国で、ローマ教皇庁（法王庁）の強い統制の下におかれていた。ポール・ロワイヤル修道会の信仰内容に対して教皇庁から疑問が出され、プロヴァンシャル論争とよばれる有名な論争が起った。パスカルはこの論争に参加して多くの文章を書いている。彼の信仰と思想について知るには最も重要な問題なのであるが、ここには当時のフランスの政治状況や教皇庁内部の情勢など複雑な背景があって、なかなかわかりにくい。実をいうと私などそういうことには全く無知だったので、今回塩川さんの詳しいゆきとどいたご研究によって、新しく眼を開かれたような思いを味わっている。時代の複雑な政治状況の中で、信仰というものの意味についてひたすら問いつづけた哲学者の姿が浮び上ってくる。帯封にある「われらの同時代人パスカル」という言葉が示しているように、思想が混迷する現代に光を投げかけている思いを味わった。

坂部 恵

かつておよそ三〇年ほど前までの日本では、パスカルの『パンセ』といえば、まず「修養の書」、「人生論」の書として読まれるべきものと一般に受け止められていた。三木清の処女

作『パスカルにおける人間の研究』（一九二六）が、作者の内面に参入する解釈学の方法で書かれていたことの影響もあったのだろう。（これは余談だが、公私両面での挫折で失意の極にあった三木を、和辻哲郎がある集まりの席でさり気なく慰めたことがある、とかつて三木の親族の方に伺った。）

さてそこで、今回の塩川氏の受賞作である。塩川氏にはすでに仏文、邦文でパスカルについてハイレベルの本格的な研究書があり、パスカル研究の領域では世界的に知られた学究である。今回の著書に納められた論稿の大半も仏文と並行して発表されている。「表徴」、「比喩」、「秘蹟」などを中心テーマとして周到な文献博捜と精緻な読解を重ねた研究は、本書で一層幅と深さを増し加え、余裕と成熟を感じさせる完成度の高さを示すにいたっている。三木清の記念碑的な著作から八〇年近く、文献学的な精細と歴史的な見識の広さは格段に進んで、時代がひとまわりしたという感慨を禁じえない。その理由はこうである。

塩川氏の営為は、和辻哲郎の推奨して止まなかった文献学（フィロロジ）的研究の最良質のものにぞくする。本書中の「引用句の運命—未完の『プロヴァンシャル』書簡の一句をめぐって」などは、気の遠くなるような資料博捜の中からパスカルの意中を探りあてるスリルに富んだ研究の典型である。また信仰に無縁な者を説得すべき有名な「賭」についての断章を取り上げた章で、著者は一見抽象的で冷徹な議論の背後に深い霊性と祈りの鉉脈をつきとめている。抑制の効いた叙述のなかから、人間パスカルがたしかに姿をあらわす。このような作品に出会うことは、おなじ人文学の研究に携わる者にとって最大の歓びといってよい。

関根 清三

今年度の受賞者・塩川徹也氏は、パリ大学に提出しニゼ書店から出版された博士論文『パスカルと奇蹟』（一九七七年）以来、国際的に活躍しつつ、伝統あるわが国のパスカル研究も牽引する役割を担って来られた。受賞作はその間、四半世紀にわたって折りにふれて発表されたパスカルをめぐるモノグラフを集成した大著である。

その諸論考は、主として四つの関心をめぐっている。一つは、『パンセ』の周知の断章に解釈上いまだ未解決の謎を探り出し、特に『キリスト教護教論』の構想との連関において、謎解きを試みることである。二つは、権威や象徴、信仰等々の諸観念の相互の関連と生成の過程を探索することであり、三つは引用の典拠を探し出すことによってパスカルの思索と活動の現場を突き止めることである。そして第四に、護教論の戦略家としてのパスカルの、説得のレトリックを解明していくことであった。これらの関心は互いに呼応しつつ、『パンセ』の掌編の新解釈から全体像の解明、さらには信仰と政治の原理的な問題究明に至る、様々な新しい知見と洞察を、著者に—そしてまた探求の過程を手の内を明かしつつ語る著者のレトリックの妙によって、生き生きと読者の前にも一、啓き示すのである。

今年度の候補作品は力作好著ぞろいで、例年以上に豊作であったが、論文集とはいえ、右の四本の柱に支えられた一著としての纏まりと完成度、またその三分の二が国際的な学術誌にフランス語でも発表されている国際性、そして何よりも、テキストに率直な疑問をぶつけ、それへの解答の可能性を畳み掛けるように探索しつつ、最後に一気に新しい視野が開けてくる学問研究の醍醐味において、しかもその探求の過程を読者と共有しようとする著者の開いた姿勢において、ひとときわ光彩を放つ御労作の受賞を、著者、そして現在未来にわたる読者とともに、慶びたい。